主人の分まで長生きして

高津区支部　工藤　京子（妻）
戦没者　工藤　角蔵
戦没地　フィリピン

私は今年の八月で満八十九才になりました。思い起こせば戦後六十五年、あっという間に過ぎました。長い様であり短い様な感じで、いろいろな事が走馬灯の様に浮かんできます。

主人と結婚したのが昭和十五年十一月、主人は二十二才私が十九才の時でした。最初は川崎で世帯を持ちました。その頃は皆が貧乏でしたので本当に何もないミカン箱一つからの生活でした。一年後に長女が生まれ、二年後昭和十八年に次女が生まれました。その頃が私の一番の幸せな時でした。強制疎開で高津に引っ越して来たのが昭和十九年四月二十九日、忘れもしません。その時主人のはいていた下駄が車から降りたとたんに半分に割れました。それから一週間して赤紙、そして一週間後の十九年五月十七日に出征。私は八ケ月の次女を背負い二才の長女の手を引いて駅まで送りました。主人の最後の言葉は「じゃあ行って来るよ、人様には後ろ指さされる様な事だけはするな」それが最後の言葉でした。まるで隣にでも行くような簡単な別れかたでした。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

最初は満州に行き、そこから手紙が二通とどきました。それが主人の遺品です。そして昭和十九年十一月フィリピン・レイテ島ナグリハンにて戦死。あっという間の出来事でした。昭和二十年八月終戦。それから私達親子の大変な生活が始まりました。

次女は生後四ケ月で高熱により後で分かった事ですがその為に脳性小児麻痺で右側半分が麻痺して歩く事が出来ない子供でした。最初は子供二人を父母にあずけ勤めに出たのですが、気になって気になって仕事も手につかない状態でした。その後近所の方に古着屋の帳場を頼まれました。しばらくしているうちに私にも出来るかもしれない、そう思って古着の鑑札を取り、自分の着物や主人の洋服を売って金に換え、その金で古着を買い店先に並べるとおもしろい様に売れました。しかし、朝早くから夜おそくまで、時には自分の背丈より高く荷物を積んで都電に乗る時など大変でした。ある時には「おばさん無理だよ、降りろ」と言う人もいれば、後ろを押してくれる人もいました。でもこの荷物を持っていかないと……毎日が必死でした。それに次女が日赤病院で手術をしてそれはそれはお金が湯水の様に出て行きました。現在の様に保険があれば良いのですが、いくら働いても足りませんでした。でも歩く事は出来ませんでした。

そして今、身体が不自由なりにも福祉のお世話になりながらどうにか平塚で生活しております。私は長女が婦人服店を開いておりますので毎日店に出ております。私も生涯現役でこの世を終わる事が出来たらどんなに幸せかと思います。

戦争さえなければ死ぬ事などなかったであろう主人の命、私も子供達も主人が自分の命を分けてくれたと思い、せいぜい楽しく長生きしたいと思っております。

©2011_財団法人神奈川県遺族会